

第三の道とは何か

西谷 修

現今の流行は「どっちもどちはダメ」のようだ。「敵につくか、味方につくか、二つに一つ」。そう、これは9・11の直後、「テロとの戦争」への参加を世界に強要した米大統領ブッシュ jr.の論法である。

「相手はテロリスト」、抹殺すべき人非人だとあらかじめ断罪し、その死刑執行者となることを世界に強要する。それがブッシュの脅迫論理だった。なぜこんな事件が起こるのか？アメリカが狙われるのか？と問うてはいけないのだ。それでは「テロリストの言い分を聞く」ことになる。問答無用でテロリストを叩き潰す、そうブッシュは言った。

これは、世界の主権者として、言いかえれば「独裁者」として振舞うアメリカの論理である。なぜ「独裁」か？ブッシュ jr.はそのとき、司直と刑の執行とを一身に引き受けて、「裁き」の審級を排除しているからだ。行政権力が立法・司法を呑み込んですべてを命令している。

これを論理学では「第三項排除」と言う。まず自分たちを A と措定すると他は非 A である。しかしすべては A でなければならない。どっちつかずの X はない。A でなければ非 A、それは抹消すべき敵だ、ということになる。その際、いや、まあ待て、両者を較べて判断しようという第三の立場 X は許されないわけだ。

かつての冷戦時代、世界は A と B とに色分けされ、互いがその領域の拡張を目指していた。だが、多くの新興の独立国は、A と B との陣取り（一方は植民地支配、他方はそれに対抗するイデオロギー支配）に巻き込まれることを嫌い、せっかくの独立を自分たちの立場で維持するために、主導国への取り込みを嫌う国々が連帯のフォーラムを作った。それが非同盟諸国会議であり、そのグループは「第三世界」と呼ばれた。

「資本主義」(西洋的自由主義)でもなく「社会主義」でもない。といっても自由主義や社会主義を排除するのではなく、近代化を受け入れて連携しながら、自立を志す地域が「陣営」に囲い込まれることを拒否するという立場だ。

だが、東側が解消された冷戦後も、「どちらかにつけ」は「西側」戦争論理の定型句になった。「テロとの戦争」が終わったことになってもそれは変わらない。冷戦後、不要になったはずのNATOでアメリカに繋ぎ留められたヨーロッパは、NATOによって「前線」はウクライナ(とグルジア)だと指定される。そしてウクライナ吸収圧力(や工作)に耐えかねたロシアが、とうとうウクライナに進攻する。国境侵犯はもちろん「国際法違反」である。だが、その「なぜ?」を問うてはいけない。ひたすら「独裁国家ロシアの侵略」と大キャンペーン。そしてロシアを「勝たせてはいけない」とウクライナに戦争を強要し(実際、22年3月には停戦協議までいったが停戦させなかった)、西側挙げて物心両面で徹底支援。「ちょっと待て」と言おうとすると、「ロシアの肩をもつ」とその声を圧殺。ここで引いたら次はヨーロッパだ、「プーチンに勝たせるな」と、EUはとにかく戦争を続ける。

今ではEUが戦争の当事者で、ウクライナの抗戦は口実でしかなくなっているようだ。そのため2024年秋にはEUは「向こう10年間の支援計画」まで立てている。

ミアシャイマーやジェフリー・サックスが「西側にも責任がある」と言おうものなら、「ロシア寄りだ」「ロシアの肩をもつ」として言論の場から放逐される。要は、「我々の立場か、それともロシアの味方か」しかないのである。

すると、「プチャの虐殺」があ〜!と言って人を黙らせようとする人たちもいる。けれども、あんなことをするのは冷戦以後の「民族右派」に決まっている。ロシア軍撤退のニュースが出始めた頃からの簡単な時系列をみれば、「虐殺事件」がどのようにフレーム・アップされたのかは素人でも分かる(詳しくはたとえば安斎郁郎氏の私家版『ウクライナ戦争論』を参照)。その初期の情報の内容を一挙に覆したのはアメリカの情報筋から出てきた、2月下旬のロシア軍占領時にすでに死体が転がっていたという航空写真である。けれども、一月後には別のコンテキストで生成AIやディープ・フェイクでどんな写真も作れるということが世界の問題になっていた。この件で国連に検証を求めたのはロシアであっ

て、その後ウクライナはこの件をあまり持ち出していない。

明らかなのは、事件「発覚」の前、3月のイスタンブールで停戦交渉が設定されたとき、ウクライナ代表団の一人がその場で「ロシアのスパイ」として射殺されたことだ。代表団のあと二人はキーウに帰ってから路上で「処刑」されている（これは報道された）。このとき「停戦はするな」という強力な圧力がウクライナにかかっていたことが伺われる。その後で「プチャの虐殺」がメディア演出され、それからウクライナはEU諸国の「ロシアの暴挙を許すな」キャンペーンの後押しで不退転の戦争に向かうことになる。

ヨーロッパは「プーチンの野心」を言う。一敗地に塗れた東側が、今力を蓄えて「ヨーロッパ再征服」に乗り出しているとさえ言う（「共同通信」連載参照）。一方、ロシアは強力な経済制裁で青息吐息、社会危機にも陥っているし、プーチンも重病でもうじき死ぬ（そして体制転換が起きる）と言っているのは「西側」メディアである。その「瀕死のロシア」にヨーロッパを「再征服」する力などあるのか？ウクライナは西側供与のドローンでモスクワや軍事・石油施設を攻撃できているではないか。

歴史を振り返ってみて、ロシアが西洋にすり寄りこそすれ（プーチンも2008年まで）、一度もヨーロッパを侵略したことはない。それに対してヨーロッパは、ナポレオン、ヒトラーと二度にわたってロシアの奥深くまで侵攻している。なぜ今ヨーロッパは、次は自分たちが侵略されると恐れるのだろうか（バルト三国には恐れる理由もあるだろう）。

これまで起こった世界戦争は、いずれもヨーロッパ内の対立から生じたものだ（東アジアでは日本の「侵略」に対する中国・米英の衝突もあったが）。そのヨーロッパは今、大軍拡をして世界戦争に備えて（いや、もう始まっている戦争を「勝つまで」続けよう）ているが、それはなぜなのか。要するに相対的「没落」が怖く、グローバル化の効果を受け入れることができないのだ。つまり、世界の「西洋覇権」を失うことを恐れている。

アジアの日本は、EUと「価値を共有する」（NATOにも入りたい）のでは先はない（台湾危機で対中戦争に入らなくてはならない）。没落する西洋のパニックをなだめながら、米欧とは違う（西側とその「敵」とは距離をとる）道をゆく諸国と新たな平和と協調の秩序を目指すべきだろう。その際に指針となるの

が、どんなデジタル IT 情報妄想にも引きずられない半世紀以上も前のバンドン会議、西洋化によって一度はブルドーザーをかけられながらもその瓦礫の中から起き上がり、自立の道を開き始めた「第三世界」の方向である。(了)